

〈評釈〉『不白翁句集』 「春の部」 : 川上不白の句作からみる茶の湯観

著者	石塚 修
雑誌名	日本語と日本文学
巻	63
ページ	43-56
発行年	2018-02
URL	http://doi.org/10.15068/00151705

【評釈】

『不白翁句集』「春之部」

川上不白の句作からみる茶の湯観

石塚 修

はじめに

川上不白（二七一九―一八〇七）は、茶人としてよく知られる人物で、『角川茶道大事典』には、以下のように解説されている。

江戸中期の茶人。江戸千家流祖。紀州新宮、水野家中川上五郎作の次男。幼名亀次郎、名は新柳、宗雪・孤峰・不羨・蓮華庵・黙雷庵・円頓斎など号した。水野家は紀州藩の江戸家老職にあったので、主君の指示を受け不白は十六歳で紀州の茶道である表千家如心斎に入門した。如心斎が大徳寺の無学宗衍と相談して七事式を制定した際にも参与し、のち『七事式の書』を作成した。延享二年（一七四五）如心斎より茶湯正脈が授与され、四年後には真台子が伝授された。寛延三年（一七五〇）修行を終えて江戸へ帰る節、送別の茶事があり、如心斎は中立ちの銅鑼を打ち残し、茶会が終わって旅装の不白が露地を出ようとした時、再び銅鑼を打った。これを不白流では送り銅鑼として大切にしている。不白は江戸駿河

台に黙雷庵を建て千家流の普及に努め、冬木家に蔵せられていた利休自筆遺偈を千家に戻す斡旋をしている。宝暦元年（二七五一）、如心斎が没して再び上洛、啜啄斎を養育した四年京に留まり、その間に「雪千山を覆ふも孤峰白からず」の語から、孤峰の号を大竜和尚より受け、不白と称した。江戸では神田明神に蓮華庵・花月楼を建て、不白の周辺には鴻池をはじめ多くの支持者が集まり、東海寺琳光院を再興のために開いた茶会は一三一会、客三百数十人に及び、その寄進によって再建と利休供養塔の建立を果たした。不白は俳諧を堀内仙鶴に学び、のち大島蓼太門に入り、寛政十年（一七九八）『不白翁句集』が刊行された。ここで注目されるのは歌銘にかわる句銘が茶器に用いはじめられたことである。また不白には『不白筆記』をはじめ膨大な茶書の著作があり、茶器では、侘の中にも華やかさのある好物が多い。墓所は谷中の安立寺（日蓮宗）〔熊倉功夫〕¹

このように茶道史のうえで、京都中心の茶道界から江戸へ

下り一派を興し、なおかつ、京都の表千家のバックヤードとしての役割をも果たした人物である。それと同時に、俳諧もよくしたことでも知られている。²

文学的には、「人情本『柳の二葉』のモデル。俳諧を沾州・珪琳・白峰に学び、蓼太と密接な交渉をもち、大江丸とも親交があった³」とされる。

その作品は、『不白翁句集』（寛政十・一七九八年）・『不白翁句集拾遺』（文化七・一八一〇年）に収められ、その全体像を知ることができる。⁴これらについては佐藤悟氏による翻刻と注がなされており、今回の評釈でも参照した。

『不白翁句集』の序文で、編者である雪太郎三駱は、曾て翁の風雅あまりあるや、若き時ハ沾州に会し、壮年には珪琳に逢、老ては我雪中庵の蓼太叟にちなみて、花に月に或は画賛物くく⁵にふれつゝおもひを述し詠あり。

と書いており、不白が俳諧を、沾徳門下の貴志沾州（一六七〇～一七三九）、杉風門下の松木珪琳（？～一七四二）に師事し、そして三世雪中庵大島蓼太（一七一八～一七八七）とも交流があったことがわかる。その句について、たとえば茶人である浜本宗俊氏は、「何れも初心な句で、余技といふほどにもなく、只折にふれて口誦んだ程度のものであるが⁵」と評している。ただし、それらの句について具体的な内容の検討までは、現時点ではなされていない。

ここでは『不白翁句集』『春之部』のなかから、茶の湯ととくに関わりの深いと思われるものを選定し、その評釈をおしとす。不白の茶の湯観と茶の湯と俳諧との関係をみていくこととす

る。（なお、句読点など読みやすいように補った部分がある）

1 歳旦句

歳旦

茶の道や古きをもてけさの春

若水や夏より清き朝ぼらけ

我菴は台司の方を恵方哉

大ふくやかかハラぬ色を初むかし

すべてが改まる元日であるが茶の道は古きをもつて伝えられるのである。

若水は夏の朝の井戸の水より清らかで朝ぼらけを迎えていることだ。

我が庵は台子を置いてある座が恵方であることだ。

大福茶は毎年変わらない色であるのに、初昔という茶銘がつけられている。

この句題の「歳旦」とは、文字どおり元旦のことだが、茶の湯で新しい葉茶を摘めた茶壺の口を切って飲む口切りの茶事と同じく、「歳旦帖」や「歳旦開」で知られるように俳諧ではとくにこの歳旦句を大切にしている。『不白翁句集』でも十句をまず「歳旦」として掲げ、この四句もそこに含まれている。

「古きをもて」「かはらぬ色」といった部分から、不白の古風を尊び流行に流されないという茶人としての矜持が垣間見ら

れ、江戸の千家として茶の湯界の伝統を確実に継承しつつ、新たな茶の湯愛好者層の掘りおこしに取り組もうとしていたことを窺わせる句である。

三句目の、「台司」は「台子」については、不白の茶の湯観を伝えている『不白筆記』（宝曆八・一七五九頃成立か）に、

一 真台子御伝授ハ予が受たるハ古より今違申候 喝石岩ノ掛物ヲ以テ伝之 宗雪か家計ハ子孫ニ此例ヲ伝度候共
台子之儀ハ子ゆつり無之筈ニ御座候故伝へ申事不叶別書ニ認置申候 我子孫台子御伝へ有之候ハ、如此御伝へ被下度候 すたり不申様ニ仕度奉願候事別書ニ残ス。

〔釈文〕

一 真台子御伝授は、予が受たるは、古より今違ひ申し候、喝石岩の掛物を以て之を伝ふ、宗雪が家計（系）は子孫に此の例を伝へたく候へ共、台子之儀は子ゆつり之れ無きはずに御座候故、伝へ申す事叶はず、別書に認め置き申し候、我子孫台子御伝へ之れ有り候はば、此の如く御伝へ下さりたく候、すたり申さざる様にしたく願ひたてまつり候事、別書に残す

とある。「古より今違申候」とは、一句目の「古きをもて」と相通じ、不白自身が当世流ではなく古風な台子の継承者としての自負をもっていたことが窺える。「喝石岩（巖）の掛け軸とは、中国五山第一の名刹で虚堂智愚が住したこともある浙江省杭州の径山興聖万寿寺にあった喝石岩に由来し、真台子の伝授の証として如心斎から、この字句を書いた軸を授かったというのである。

「我菴は」とは、不白の営んだ茶室黙雷庵のことともよめるが、梅翁の「蓮華庵年中行事」（付録）に、

一 不白老師 駿河台ムネツキ坂下に住ム 小座敷二畳台目黙雷庵ト云フ 額ハ如心斎筆板ハ杉 黙雷ノ二字白字也 此ノ数寄屋後ニ中川修理太夫様へ上ル 広座敷八畳花月楼也 額無学和尚筆ナリ⁷

〔釈文〕

一 不白老師、駿河台、胸突坂下に住む。小座敷二畳台目黙雷庵と云ふ。額は如心斎筆、板は杉、黙雷の二字白字也。此の数寄屋、後に中川修理太夫様へ上る。広座敷八畳花月楼也。額無学和尚筆なり。

とあるので、二畳台目席には台子はおかれないうため、具体的な茶席を指すのではなく、茶家としての蓮華庵とすべきである。その蓮華庵こそが、まさに千家の正統として真台子の伝授を受けた茶家なのだという自負を語ろうとしている句である。自分の子孫には台子の点前を伝授しないという『不白筆記』の記事も、不白が江戸に京都の千家の名代として流儀を広めることを使命として来た意思を伝えているといえよう。

また、台子の正月飾りについては『不白筆記』に、

一 四本柱台子正月元日より三ケ日しめ飾ヲ張りて飾ル事 此方ニテモスル事也 仕様ハしめ縄へ常ノ通ウラシロなと飾り台子天井へ張り廻シ前ニテ下リタル藁ヲ両方へ分ケテいわへる也 尤其儘茶点ル也⁸。

〔釈文〕

一 四本柱台子、正月元日より三ケ日しめ飾を張りて飾る

事、此方にてもする事也。仕様はしめ縄へ常の通り裏白など飾り、台子天井へ張り廻し、前にて下りたる藁を両方へ分けて結わえる也。尤も其の儘茶点る也。ともあり、正月飾りとして定着していたこともわかる。

2 句銘

天府君より、浪花のふる国とやらんか、住よしの小松引てまいらせたりし其松の根に付たる土にて茶わん造りてと好ミこし玉へるに、手つくねしつゝ、岸に生てふとよミしわすれ草と名つけてまいらせける
此松にひかれて老を忘れ草

天府君こと、松平正升より、浪花の旧国という俳人が、住吉大社の小松を根引いて送ってきたので、その根に付いていた土で茶碗を作ってほしいと好みを求めてきた。そこで手づくねして「岸に生ひてふ」と和歌に詠まれた「わすれ草」と名づけてさしあげた。

この松にひかれてついつい老いも忘れてしまう忘れ草であることよ。

この「天府君」とは、大多喜松平藩四代目藩主松平正升（まさのり）（一七四二〜一八〇三）のことで、明和四年（一七四七）に父の隠居により家督を継いだ。明和七〜八年にかけて大坂加番を勤めた経験があるところから、大坂とも縁が深かった

可能性が高い。「浪花の旧国」こと大伴大江丸（一七二二〜一八〇五）は、俳諧を初め旧室に学び、のち良能に入門、寥太・蕪村・几董らと交わり蕉風復興運動の一翼を担った俳人である。その家業が飛脚問屋であったからではないだろうが、天府君にわざわざ住吉大社の根引き松が届け、その根引きの松の土で作った茶碗なので、「道知らば摘みにも行かむ住の江の岸に生ふてふ恋忘れ草」（『古今集』巻十四 紀貫之）の古歌に因んで「わすれ草」と銘をつけたというのである。

日々菴にて茶湯の侍合にありしうち、冴返りつゝ雪の降出しけるに

淡雪の降も茶湯の花香哉

宗雪云、其節の花生ハ無銘にてありしかハすなハち乞て淡雪と銘せられし

日々庵で茶事のとくに待合にいるあいだ、ひどく冷え込み雪も降り出したので、

淡雪の降るのも茶の湯に欠かせないしつらえの花であり香であることよ

と詠んだところ、宗雪が言うことには、その折の花生けは銘がなかったので、そのまま「淡雪」と銘にしたとのことである。

熊倉氏が先の解説で「ここで注目されるのは歌銘にかわる句銘が茶器に用いはじめられたことである」と指摘するのは、ま

さにこうした銘の付け方である。不白が嚆矢か否かは検討の余地があるが、不白が俳諧と茶の湯を積極的に融合させようとしたことが窺える好例である。

たとえば、不白が、如心齋（一七〇五〜一七五二）やその弟である裏千家八代一燈（一七一九〜一七七二）らとともに大徳寺三百七十八世無学宗衍（一七二一〜一七九二）に教えを得て制定した「花月・且座・廻り炭・廻り花・茶カブキ・一二三・員茶」の七事式というものがある。この七事式については、無学和尚の以下の偈がよく知られる。

花月 互換機鋒看子細

且座 是法住法位

廻り炭 端的底看聾

廻り花 色即是空凝思量即背

茶カブキ 千古干今裁舌頭始可知真味

一二三 修証即不無染汚不得

員茶 老倒疎慵無日 閑眠高臥对青山

不白はこれを以下のように句として詠み変えている。

北斗七星あり過去七仏あり晋に七賢あれハ梨子壺に七歌
仙あり七情七教人事の要たれハ此七事ハ（げに）我家の七
宝にこそ有けれ

花月 光（り）増（す）秋や花月の五十年

且座 荻萩の手前や露の置ところ

廻（り）花 活（生）かへる花を（に）千種の手向かな
茶カフキ 色々の月や心のはれ（晴）くもり

廻炭 紅葉（もみち）する山作りけり廻り炭

一二三 空に月人にハ花の一二三

数茶 秋の夜を花にくつろく数茶かな（哉）

花寄 秋の野の錦敷けり筒の数（はなよせやこころくの

唐錦）¹⁰

（ ）は柿衛文庫の本文
この句については、『不白翁句集拾遺』で本文は知られていたが、今回、柿衛文庫での『俳諧と茶の湯』展観に軸とされた存在が確認でき、不白の茶の湯への俳諧の活用例として挙げられる。

3 利休思慕

利休忌

抛てる茶筌に花の匂ひかな

投げ捨てる茶筌に花の匂いが感じられることだ。

これは千利休の号である「抛筌斎」を発想のもとにした句である。この号は、もともとは魚を捕る道具である筌（せん）をなげうつという意味に由来するが、それを不白は茶の湯の必需品である茶筌に転じているのである。

聚光院詣

春毎に勅許の居士や塚の花

毎年の春になり利休忌を迎える毎に、勅許の「利休居士」の号を賜つた利休の墓所に花が供えられていることだ。

利休忌につづいて利休の菩提寺である大徳寺聚光院への墓参の句である。利休居士の号は、利休が天正十三年（一五八五年）十月に秀吉による正親町天皇への禁中献茶に奉仕するにあたり、宮中に参内するために勅賜されたもので、まさに「勅許の居士」ということになる。「春毎に」とあるが、不白は心の中では毎年の墓参を願つていたのであろう。そのことは、のちに、東海寺琳光院に利休居士の供養等を勧進し利休忌を毎年に営んだことからわかる。

紫のゆかりあればや大徳寺の聚光院に靈をとゝめ給ふ不審菴抛筵齋利休居士の宝塔を東都万松山東海禪林にうつしゝてと思ひ立しより、いつれか此靈地ならんと、大徳寺三百七十世萬輝禪師宗旭大和尚の東海寺九十二世の輪番はてゝ爰の清光院に在し玉ふに合体してそこらもとむるに、清光に隣れる琳光院は堂宇荒壊し近ころ八住なせる僧もななく庭ハ荊棘心のまゝにひろこり狐狸もえたる栖とやなすらん、是を再興し且法塔建んハ猶功德大ならんと思ひけるころ、相模國の杜す多たなるか觀自在菩薩の御厨子再興に御仏負奉て此精舎に来つる。其破れたる厨子のうちに識しの筒入た

り。折から仏意伺ひミンと信心して是をとるに第十八番なり、識の詞にいはいはく、離暗出明時 麻衣交緑衣 舊憂終是退 遇祿応交輝とあり、此識奇なるかな妙なるかな、出明は清光に応し、交緑衣は身立の意、光輝ハ則萬輝也、遇祿ハ此大和尚琳光院を中興し給ふへき兆にして誠に仏意祖意にもかなひける大士の御教へと発心決定して、土石の功をつみ、居士の塔及び本堂、庫裏、門、塀迄悉く成就したり、殊に此門ハ聚楽の御所の傍にありし居士の門を世に揚士門といひし、是をこゝに其摸しゝたる也。將此事跡を林祭酒信言朝臣撰述ありしかハ、禪師筆を揮て石上に勒し、猶万歳を祝し玉ふ、則此供養ハ明和五年戊子春二月二十八日、居士の祥忌正当也。東海寺一山の智識をはしめ各僧侶を招待し、偈をもて拈香供養、如在の礼をもて敬て供仏齋僧、時に萬輝禪師一偈あり、曰、

大千沙界現全身 一塔巍々東海浜 地先苔深今酒掃 烟雲瓦礫為生春

云々因て我又謹て和

毫端点出現全身 塔院中興東海浜 薰破幾人無鼻孔 茶香偏滿万松春

落誠の慶讚 挿草の功績 既に事をはりぬれハ 別に一句子を余して

つき穂して古き匂ひや梅花

（釈文）

紫のゆかりあればや、大徳寺の聚光院に靈をとどめ給ふ。不審菴抛筵齋利休居士の宝塔を東都万松山東海禪林に写し

して、思ひ立しより、いづれか此の靈地ならんと、大徳寺三百七十世萬輝禪師宗旭大和尚の東海寺九十二世の輪番果てて、爰の清光院に在し給ふに合体して、そこらもとむるに、清光に隣れる琳光院は堂宇荒壊し、近ごろは住なせる僧もなく、庭は荊棘心のまゝに広がり、狐狸も得たる栖とやなすらん、是を再興し、且つ法塔建んは、猶ほ功德大ならんと思ひけるころ、相模国の杜多なるが観自在菩薩の御厨子再興に、御仏負ひ奉て、此の精舎に来つる。其の破れたる厨子のうちに識の筒入りたり。折から仏意伺ひみんと信心して是をとるに、第十八番なり。識の詞にいはいく「離暗出明時 麻衣変緑衣 舊憂終是退 遇祿応交輝」とあり、此の識奇なるかな妙なるかな、出明は清光に応じ、変緑衣は身立の意、光輝は則ち萬輝也、遇祿は此れ大和尚琳光院を中興し給ふべき兆しにして、誠に仏意祖意にもかなひける大士の御教へと発心決定して、土石の功を積み、居士の塔及び本堂、庫裏、門、塀迄悉く成就したり。殊に此門は聚楽の御所の傍にありし居士の門を世に揚土門といひし、是れをここに其れ摸ししたる也。將に此の事跡を林祭酒信言朝臣撰述ありしかば、禪師筆を揮て石上に勒し、猶ほ万歳を祝し給ふ。則ち此の供養は明和五年戊子春二月二十八日、居士の祥忌正当也。東海寺一山の智識をはじめ各僧侶を招待し、偈をもて拈香供養、如在の礼をもて敬て供仏齋僧、時に萬輝禪師一偈あり、曰く、「大千沙界現全身 一塔巍々東海浜 地先苔深今洒掃 烟雲瓦礫為生春」云々、因て我れ又た謹て和す。「毫端点出現全身 塔院中

興東海浜 薰破幾入無鼻孔 茶香偏滿万松春」と、落誠の慶讃、挿草の功績、既に事終はりぬれば 別に一句、子を余して

つき穂して古き匂ひや梅花

紫野大徳寺との縁があるからなのであろうか、京都の大徳寺の聚光院に御霊を祀られている不審菴抛笠齋利休居士の供養塔を江戸の万松山東海寺にお移ししてと思ひ立って以来、どこがそれにふさわしい靈地であらうかと探していたところ、大徳寺三百七十世萬輝禪師宗旭和尚が東海寺九十二世の輪番を終わられて、東海寺の清光院にご滞在なさっていたために、そのあたりを探した。清光院に隣りあう琳光院は堂宇も荒廢して、近頃は無住寺となり、庭も荒れ果て草が生い茂り狐狸のすみかともなっていたので、これを再興し、さらには供養塔を建立するのは、功德も大きいだらうと思っていた頃、相模国の杜多という者が、観音菩薩の厨子を再興しようとして琳光院まで御仏を背負って来た。その壊れた厨子のなかにおみくじの箱が入っていた。そこで観音菩薩のご意向をたずねようとしてくじを引くと観音の縁日である十八日にちなんだ十八番であった。くじの言葉には「離暗出明時 麻衣変緑衣 舊憂終是退 遇祿応交輝」とあった。このくじのまことに奇跡であった。それぞれは、出明は清光院の清光に呼応し、変緑衣は身立の意味、光輝はまさに萬輝和尚の萬輝である。遇祿とは萬輝和尚が琳光院を中興なさる兆候で、誠に仏意祖意にもかな

うことであつた。そこで、建立をはじめ、利休居士の塔及び本堂、庫裏、門、塀まですべて完成させた。とくに、この門は秀吉の聚楽第の御所の傍にあつた居士の門を、世に揚土門といったのを、ここに模したものである。まさにこの事跡を林祭酒信言朝臣撰述によつて、禪師が揮毫して石に刻んで、末永く祝しなされた。そしてこの供養は明和五年戊子春二月二十八日で、居士の祥忌正当の日であつた。

東海寺一山の智識をはじめ各僧侶を招待し、偈を以つて拈香供養、如在の礼を以つて敬て供仏齋僧、時に萬輝禪師一偈があり、それに言うことには、「大千沙界現全身 一塔巍巍東海浜 地先苔深今洒掃 烟雲瓦礫為生春」云々とあつた。そこで私がまた謹んで唱和した。「毫端点出現全身 塔院中興東海浜 薰破幾入無鼻孔 茶香偏滿万松春」と、落誠の慶讃、挿草の法要が既に事終わったので 別に一句、子を余してあらたに穂をついで古い香りをただよわせる梅の花であることだ

不白は、大徳寺聚光院にある利休居士の宝塔の写しを江戸の東海寺に作らうとした。そのための土地を選んだところ、大徳寺三百七十世をつとめた萬輝宗旭禪師（一七〇七—一七八三）が東海寺九十二世の輪番を終わり、東海寺の清光院に永住することにしたのになみ、隣のあははてた琳光院を再興して、そこにその宝塔を建てようとした。たまたま相模国の杜多という者が観音の厨子を、再興にあわせて持参したが、その中に籤の

箱があり引いてみると、まさに再興の意向を言い当てた内容であつたため、不白は再興の意思をいよいよ固めたという。

再興は順調に進み、その山門は聚楽第の側にあつた利休屋敷の門をとくに写したものとした。利休の事跡を幕府の儒官林家の五代目林鳳谷（はやしほうこく 一七二一年—一七七四）に依頼して、萬輝禪師が揮毫した。落慶供養は明和五年（一七六八）二月二十八日の利休忌に盛大におこなわれた。¹¹

萬輝宗旭は「東海寺輪番」によると、
九十二世 萬輝宗旭和尚

嗣法大溪座元、大溪嗣萬拙。宝曆七年出世。同十年東海寺輪番。天明三年十一月十九日寂。寿七十七又七。¹²

とある。竹貫元勝は、
萬輝宗旭（一七〇七—一七八三）は、近江の人で、徳禅寺の天溪紹策の法嗣である。天溪は 大徳寺二九八世の萬拙宗庸（一六六七—一七二二）の弟子で、清巖宗渭の法系を嗣いでいる。宝曆七年（一七五七）に出世開堂して大徳寺三七〇世となり、宝曆一〇年に品川・東海寺の輪番をつとめる。大徳寺泰勝庵に五世として住し、また「清光」を兼知したというが、この清光は清巖宗渭が開創した東海寺塔頭の清光院のことなのかもしれない。天明三年（一七八三）一月一九日、世寿七七で示寂した。¹³

と解説しているが、琳光院については言及していない。
「東海塔頭十七順席」によると、

云龍院	同	清光院	祖清巖	定誓院	祖江雪
女性院	祖沢庵	長松院	同	妙解院	同

春雨庵 祖沢庵 慈雲庵

少林院

師聖院 祖天倫 法雲院

琳光院 祖萬輝

真珠院 祖秀山 高源院

祖怡溪 瑞泉院

泰定院 祖龍睡 白雲庵

祖天柱¹⁴

とあり、萬輝が開祖としてあげられている。ところが、坂本道夫「東海寺塔頭の創建について」では、寛政四年（一七九二）の「寺社奉行板倉周防守御尋への書上之扣」を引用しており、そこには、

一、琳光院開祖 天倫和尚 元禄七年戊辰建立、後敗壞、中

興開祖萬輝和尚、中興施主川上不白、当時清光院兼帯¹⁵

という記事が見られるとする。伊藤克己「品川東海寺の塔頭¹⁶も天倫としている。この天倫とは、天倫宗忽（一六二六〜九七）のことであり、竹貫元勝によると、

天倫宗忽（一六二六〜九七）は「不可得道人」と号した。

京都の出身で、俗姓は上月氏である。寛永一四年（一六三七）に高桐院の清巖宗渭に師事し、寛文元年（一六六一）に印可され、法嗣となる。延宝三年（一六七五）に大徳寺に奉勅入寺して二一八世となり、清源庵に住した。翌延宝四年に品川・東海寺の輪番をつとめたが、元禄二年（一六八九）六月に四代將軍家綱（巖有院殿）の命を奉じて東海寺住持となった。¹⁷

とされる人物である。これらの資料から、天倫と萬輝をつなぐ人物は清巖宗渭ということになる。清巖は千家三代宗旦と深い関係を持つ人物として知られている。不白が江戸での千家の精神のよりどころとなる利休の供養塔を建立するにあたり、そう

した大徳寺系の人脈を活用した可能性が高い。

しかし、その不白の努力は没後まではずづかなかつたように、約六十年後には、林述斎『新編武蔵風土記稿』によれば、琳光院 南門ヲ入テ右ニアリ是モ住僧ナク清光院ノ持トス小鐘アリ陣鐘ナリ或ハ朝鮮ヨリ舶来セシトモ云高一尺六寸径一尺一分厚一寸二分古色ノ物ナリ又境内ニ喫茶家利久ノ墓アリ後人ノ立シ所ナリ¹⁸という状況にあった。

扱此院此塔成就してより年々歳々の春、利休忌と号しつゝ此所に会して、先師如心斎の巧夫に成し七事の式をもて、居士の霊を祭る事とハなりぬ

めくむ茶の恵ミを摘て手向かな

さて、この琳光院が完成してから毎年の春に、利休忌と称してここに集まって、先師である如心斎が工夫された七事式でもって、利休居士の霊をお祭りすることとなった。芽を出す茶の恵みを摘み手向けとすることであるよ。

こうして琳光院に利休居士の宝塔を建立し、江戸での千家の精神的なよりどころを作った不白は、毎年、利休忌を江戸でもおこなうようになる。「七事の式」とは、如心斎が弟である裏千家八代一燈らとともに無学宗衍に教えを得て制定した「花月・且座・廻り炭・廻り花・茶カブキ・一二三・員茶」のこと

で、それを利休忌には披露して利休居士の供養としたというの

である。

4 京都人脈

東叡大王隨宜樂院の准後の宮、或時、此琳光院に渡御ならせ玉ひけるに御茶奉りて

御園の花や竹田の森祝ひ

隨宜樂院の准後の宮とは、公遵法親王（一二二二～一七八八）のことで、東叡山寛永寺七世と九世、輪王寺宮御門跡第五世と七世と天台座主第二百三世もつとめ、隨宜樂院前天台座主准三宮一品公遵法親王と呼ばれる。中御門天皇の第二皇子で、享保一六年（一七三一）に得度して公遵を名乗り、元文三年（一七三三）三月に輪王寺門跡継承する。元文五年（一七四〇）三月一六日一品に昇格して、延享二年（一七四五）五月には天台座主、寛延二年（一七四九）七月には准三宮になる。宝暦二年（一七五二）八月に隠居して隨自意院宮と称したが、明和九年（一七七二）九月に輪王寺門跡を再任し、安永九年（一七八〇）三月に隠居し、隨宜樂院宮と称される。

このような名門が不白の再興した琳光院におでましになったことは、まさに不白にとっては榮譽の極みであった。「御園の花」とはまさに公遵法親王のことであり、「竹田」は茶師、「森」「祝」もそれぞれ茶銘に関わる語でもある。

公遵の東海寺訪問は史実としても確認できる。東海寺「重書」によると、

宝暦十庚辰三月十八日承輪任命、八月二十六日進寺、九月二十八日登城、謁台顔伸大將軍叙嗣之賀、……三月晦日東叡山隨自意院宮（*傍注／公遵法親王、中御門天皇第二皇子）入興 為苑中一覽也、……

宝暦十一年辛巳年八月廿六日 宗旭（花押）¹⁹

とあり、萬輝の輪番中にも公遵が東海寺を訪問しているの、不白と公遵の関係をとりもつたのは萬輝であった可能性もある。

最上乘院法親王の上野の本坊にめされて、御茶湯の事申上げよとおそれおほくも御師範の御ゆるし蒙りし時
伏てみる雲の上野の桜かな

この最上乘院法親王とは、公啓法親王（一七三三～一七七二）のことで東叡山寛永寺八世、輪王寺宮御門跡第六世、天台座主百八世をつとめ、最上乘院前天台座主一品公啓法親王と呼ばれた人物である。東山天皇の皇孫で中御門天皇の養子となり、寛保四年に得度し、宝暦二年（一七五二）輪王寺門跡、宝暦十二年（一七六二）天台座主となった。

不白はこの公啓法親王にも召し出されて、茶の湯の師範となる。「雲の上野」には「雲の上」が掛けられていて、まさに雲の上にいる輪王寺の宮様に茶の湯を教授することへの畏敬を表している。

内裏へうちく、献し奉り玉ふよし准后のおほせを蒙り、御

花生たてまつりけるころ
九重の花に仰くや一重切

公遵法親王や公啓法親王との交流により、不白の茶の湯の世界は広がりを見せ、内々に内裏に不白作の一重切の竹の花入れが献上されたというのである。不白が京都を離れて江戸に下つた理由は、おそらくは京都での如心齋門下との軋轢だと言われているが、そうだとすれば、京都を追われてきた不白にとつて内々ではあつても宮中に自作の花入れが献上できる環境を得られたことは、なによりも名誉であつたと推測できる。

5 外様大名との人脈

長門少将重就朝臣、茶御稽古の日、或とき花月を題して
晴曇る中にひらくや月に花

毛利重就公の、茶の湯のお稽古のあるとき、「花月」と題して花月の札を引いた客たちが役札（やくふだ）である月の札や花の札に、当たり外れで晴れたり曇ったりしていることだ。

長門少将重就朝臣とは萩藩七代藩主毛利重就（しげなり）（一七二五〜一七八九）のことで、長門府中藩主八代であつたが、寛延四年（一七五一）に宗家となつた。殖産興業につとめ、藩中興の名君とされる。不白はこうした大名にも稽古をしつていた。

その稽古の日に「花月」を題としての句であり、おそらく茶の湯の花月の式が意識されていたと考えられる。花月の式とは如心齋らが考案した茶の湯の稽古の一形式で折据と呼ばれる開閉式の包みに札が入れてあり、その当たり外れで茶を点てたり飲んだりする。この「晴曇る」とは、おそらくその役札の当たり外れによる参加者たちの反応を想像させ、「ひらく」とは札を入れる折据を「開く」様子を連想させる句となつている。

6 東海寺以外との交流

巨福山建長寺の山門ハ同国長谷寺の観世音の御堂なりしを、むかし其御堂修補の時、其古材を引て建たりしものとかや、夫を又此開山大覚蘭溪禪師五百年忌の法養（よ）に修営有しかハ、土木の助、予か微力を進し時、此一本を乞とりて東都にひかせ、道安好の数寄屋をたて、床柱に用ひたり、誠に千載の古木友としてなを老を養ふへし
活てみる春やむかしを花の友

巨福山建長寺は神奈川県鎌倉市にある鎌倉五山の第一位の臨濟宗建長寺派の大本山である。北条時頼が聖一國師とともに建て、建長五（一二五三）年に南宋から来日していた蘭溪道隆（一二二二〜一二七八）を開山とする。長谷寺は同じく鎌倉にある寺で、本尊が奈良の長谷寺の十一面観音と同じ木で作られたと伝えられる。蘭溪道隆の五百年忌にあわせて建長寺の山門を修復したとあるが、実際には安永四年（一七七五）に二百里

世万拙頑直によつて再建された。その余材を道安好みの茶室の床柱としたのである。不白は当時五十八才で、五十五才で自得齋宗雪に家督を譲り悠々自適の茶の湯を楽しむ生活のなかで、こうした鎌倉の寺院との交流も積極的におこなっていたことがわかる。

7 禅味と茶味

三駱問如何是茶 答曰
立歸みよ我宿のむめの花

三駱は『不白翁句集』の序文を書いた俳人だが、出自はよくわかっていない。大島蓼太に俳諧を学び、振々亭という結社をもって活躍していたことは確認できる。不白の近隣に住んでいたことは「今の玄盧ハ我が白屋に隣レハ」と序文にあることからわかり、そのため親しい不白に「茶とはなんぞや」とのまるで禅問答のような質問をしたのであろう。²⁰ 不白はそれになりたいし俳人仲間として句で答えた。他人に尋ねて答えを得ようとせず、まずは自分に立ち帰って考えてみなさいという句意となる。

『不白筆記』では、

一 茶之湯ハ常ノ事也 道心礼義第一也 …… 仮ニモ我ト人トヲ出来ス事ナカレ 我ト人との二身在ハ茶道ニあらず
……

と教え、我と他人との区別のあるうちは茶道ではないとまで言い切っている。「立ち帰りみよ」とは、そうした意味も込めら

れているのだろう。

8 如心齋への思い

先師如心翁と、もに嵯峨に遊びけるころ、西行堂にて
西行のむかしをけふの桜哉

先師である如心齋と共に、嵯峨に出かけていたころに、西行堂で詠んだ
西行の昔を偲ばせる今日の桜であることよ

如心齋は不白のまさに心の師でもあった。はやくに不白の才能を見だし、開花させようとしたため、古くからの門弟たちと不白との間に軋轢が生じてしまった可能性が高いことは古くから言われている。²¹ 先の熊倉氏の解説にも「寛延三年（一七五〇）修行を終えて江戸へ帰る節、送別の茶事があり、如心齋は中立ちの銅鑼を打ち残し、茶会が終わって旅装の不白が露地を出ようとしたり時、再び銅鑼を打った。これを不白流では送り銅鑼として大切にしている」とあるように不白を心ならずも江戸へと旅立たせた。そんな師とともに不白は季節ごとくに京都のあちこちを清遊したのである。後に、自らも西行法師のように東国に下る運命にあるとは、この句を詠んだときには予想だにしていなかったのではないだろうか。

9 おわりに

ここまで、川上太白『不白翁句集』『春之部』でとくに茶の湯に関係が深いと考えられる句を、茶の湯を基盤において解釈してみた。不白は江戸という千家の新興地での茶の湯の拡大にあたり、京都で培った人脈と新たな江戸での人脈を幅広く活用しようとしたことが、それらの句からうかがえる。その人脈の形成の一端として俳諧を利用した可能性がある。それは不白の人脈も、「東西の吟行三〇〇余回、編集に関与した俳書二〇〇余部、免許した判者四〇余輩、門人三〇〇〇〇人と称され」²²た蓼太の人脈の広さに近いものがあるからである。そうした幅広い貴顕との交流のなかで、俳句を自己の茶の湯文化の喧伝の戦略として大いに活用していた実態も句の前書きなどから確認できた。京都の人脈のなかでも、和歌と同じように堂々と俳句を詠み、自己の表現としていたことは、句の巧拙は措くとしても、俳諧の文化的な活用として注目すべきであろう。また、俳諧への傾倒は、如心齋にたいする徹底した忠節が示すように不白のもつ強固な信念あつてのことであろう。また、そのおもねらない態度が、むしろ公家・大名・町人と、多様な弟子多くの門弟から信頼を勝ち得る重要な要素となっていたとも考えられる。

注

- *1 林屋辰三郎ほか『角川茶道大事典』（角川書店 二〇〇二）三二四頁
 2 日本古典文学全集『近世俳句集』（小学館 一九七二）にも川上太白の句は、「永き日や絵馬をみてゐる旅の人」「あら野行く我が影もなき暑さ哉」「牛嶋を猪牙で行く夜や銀河（あまのは）」「浪うつてよせ来る勢子や花薄」「胴炭の置き心よし除夜の鐘」の五句が採録されて

- いる。また高木蒼梧『俳諧人名辞典』（巖南堂書店 一九六〇）にも俳人として所載がある。
 3 尾形仿編『俳文学大辞典普及版』（角川学芸出版 二〇〇八）項目執筆・佐藤悟 八一七頁
 4 江戸千家茶の湯研究所『不白翁句集』 講談社 一九八一
 5 浜本宗俊『不白の茶』（井口海仙ほか編『茶道全集』巻十一 創元社 一九三七）四〇三頁
 6 江戸千家茶の湯研究所『不白筆記』一九八七
 7 川上宗雪『川上太白の茶道社会』（武家茶道の系譜）（一九八三）ペリかん社、二一九―二五六頁
 8 江戸千家茶の湯研究所『不白筆記』一九八七 一三五―一三六頁
 9 千宗且作茶杓・随流齋極書 句銘「初雪に主客むつまじ釜の煮」の存在が認められる。（筒井紘一『茶道具は語る』淡交社 二〇一三 一三二頁）
 10 柿衛文庫『俳諧と茶の湯』平成二九年秋季特別展図録 二二頁
 11 川上宗雪『茶人川上太白』茶の湯研究所 二〇〇七 六二頁では「玄性院に利休居士の法塔が場所を移されて伝わっている」とするが「清光院」とすべきである。
 12 『東海寺輪番』『沢庵和尚全集』六（同刊行会 一九二八）二六頁
 13 竹貫元勝『大徳寺僧の略歴』（淡交社 二〇一一）一六〇頁
 14 『東海塔頭十七順席』『沢庵和尚全集』六（同刊行会 一九二八）三八頁
 15 坂本道夫『東海寺塔頭の創建について』（品川歴史館紀要「第二号 一九八七」）九二頁
 16 伊藤克己『品川東海寺の塔頭』（品川歴史館紀要「第六号 一九九二」）九頁
 17 竹貫元勝『大徳寺僧の略歴』（淡交社 二〇一一）一一〇頁
 18 林述斎『新編武蔵風土記稿』（文政一・一八二八年成立）
 19 「重書」品川区史料（九）（品川区教育委員会 一九九六）一三七頁
 20 不白の句の禅味については丸山一彦氏が「句にも茶禅一味の雅趣をたたえたものが多い」と指摘している。（日本古典文学全集『近世俳句集』「川上太白」解説 三四七頁）
 21 川上宗雪『茶人川上太白』（茶の湯研究所 二〇〇七 三六頁）では「不白婦任の直接の契機は、主君（紀伊藩江戸詰家老水野忠昭）の遊

去に因ると推察する」としている。
尾形 仿編『俳文学大辞典普及版』（角川学芸出版 二〇〇八 項目執
筆・加藤定彦）九六八頁

（いしづか おさむ 筑波大学）